

### <書評>里原昭著 『琉球弧の文学：大城立裕の世界』

門脇，浩次郎 / カドワキ，コウジロウ / KADOWAKI, Koujirou

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

111

(終了ページ / End Page)

113

(発行年 / Year)

1993-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019677>

再構成するのではなく、現実をそっくりそのまま取り込んでくる」という描写方法に関する指摘は、今後も佐多稲子を研究する者に多くの示唆を与え続けるに違いない。

尊敬してやまない作家を研究対象に据えるというのは、ある意味で非常に辛い困難な作業である。作家との距離をいかにとるか、あるいはいかに突き放すかといった問題を常に

里原 昭 著

## 『琉球弧の文学―大城立裕の世界―』

門脇 浩 次 郎

喚起させられると共に、対象に烈しい情熱を持ち続けることの素晴らしさをあらためて教えてくれた研究書であった。  
(やざわ みさき・一九八八年卒)  
(一九九二年七月、オリジン出版センター刊  
・三五九〇円)

△著者＝文学部講師

この二十数年来、私自身の生活は、(流通ビジネス)の世界に浸りきり、東京、横浜、長野と、生活拠点を移しながら、(酒)へ食品)の売買や、(マーケティング)に明け暮れていた。国際政治や、経済変動に際しても、商品のコストにそれがどう影響するか、市場変動はどうなるか、といったレベルの興味・関心が第一義的に働くような環境にあった。里原さんから、本著を贈られた時、感想をまとめようと試みたのであったが、「主題」

の大きさと重さに、試みは先延ばしにせざるを得なかった。今、この原稿依頼を受けたのだが、なお、自分自身の大城立裕論を持っている。今はただ、本著をめぐって、里原さんという人間とのかかわりについて、ささやかな感想をのべる程度にとどめさせていたきたい。

里原さんとは、アルバイト講師として付属の夜間高校に在籍した時、先輩教員として指導してもらったのが触れ合いの最初であっ

た。数年後、「戦後文学」の研究会を結成し、定期的な交流も持った。又、小原元先生の遺稿集を出版する時には、このグループも参画したのであったが、そうした係わりの中で、里原さんは、最も気配りの優しい人であり、私達は結構それによりかかっていたのだが、しかし氏は反面、内部に硬質の問題意識をかかえていて、時として妥協を許さない姿勢を見せる時もあった。

「琉球弧の文学」を最初に一読した時、私は、アルバイト講師時代の或る場面を反射的に思い出していた。当時全国的に、学園闘争、が拡大し高校段階に迄及んでいて、この学校にもかすかな余波のひろがりを感じられていた。この時期、生徒達の一泊二日の研修旅行があり私も同行した。その夜数人の生徒達が教員の部屋を訪れ「あなた達にとって、教職とはどんな意味があるか」といった内容の問いかけをしてきた。明確な答えは当然なかった。私もむしろ、その質問の動機のごう慢さを指摘することで答えに逃げをうっていた。これにつき後に里原さんから、この問題はもっと本質的に受け止めるべきではなかったかとのコメントが出て、私はそれを正論と

して聞いた。だが私の生きざまは、その時揺れており、問題意識は脆弱であった。私はあの「斜の構え」でしか対応できなかった。そしてこの記憶は永く私の内で消えることはなかった。

「琉球弧の文学」の主題は「オキナワ人の文化的アイデンティティの回復、ひいては人間としてのアイデンティティの確立」の思想形成のプロセスを、大城立裕の作品分析を通して語り「オキナワ人の苦渋にみちた沈黙」、が「混沌とした状況のなかで複雑にゆれながら、オキナワ人の〈生〉の積極的な意味」を追及、検証してゆくことにあると思われ、それに言及するには、私自身のアイデンティティのいくばくかの提示なくしては困難であり、とまどいとためらいが生じてくるのである。

本著の中で作者は「私が沖縄を核として自己検証をめざす時の対象世界を凝結し常に私の生を相対的に把握する時の証となってくれる」作品として「まぼろしの祖国」に多くのページをさいている。その中で、伊礼善明―荻堂ナツ―荻堂善市、の中心人物に焦点をすえ、伊礼善明は「現実のオキナワ人の主体性

の回復と喪失の反復状況からヤマトへの復帰を志向する教職員会の歯車」として、荻堂ナツは、敗戦前年米軍による那覇の空襲で〈辻の華〉から解放され「生きる前面の対象をまると自分の世界に取り入れ―ヤマトへの関わりは、思想的にも、生活的にも無縁で〈沖縄〉共同体の土着的、庶民感覚の領域で生の〈実存〉を支える」人物として、更に荻堂善市は「〈オキナワ〉〈ヤマト〉〈アメリカ〉という三つの同心円を貫く自己解放の思想核と思念の形成」の為に〈ヤマト〉への復帰を拒否し〈自死の重み〉を背負って〈まぼろしのシマ〉へ出立してゆく人間として設定されている。言いかえれば、善明は〈政治的自立〉を、ナツは〈日常生活の自立を〉、善市は〈思想の自立〉をテーマに背負って存在しているとも思える。里原氏は特に、善市の〈精神の位相〉に最も深い思い入れを注入していると思えるが、読後感から言えば、私は荻堂ナツの人物形象が最も印象に残るようになった。「沖縄の共同体の土着的庶民感覚で〈強か〉に生き」ながら「亀甲墓」の善徳のように「善賀先生」を発作的に追って〈惨死〉することはない。「アメリカ世が良いに

きまっている」と決然と言いつつ、ナツの存在感に更に分析を加えれば、作品評価の新しい可能性が生じるかもしれないという素朴な印象であるが。

又「亀甲墓」の善賀先生の「諸盗み」のイメージも「体制的支配の道具にしかすぎなかった教育思想の虚像が顕在化」したと同時に「虚像」がまぎれもない日常的現実として継続し、善徳を「惨死」させる要因を含むのであれば、安易に切り捨てられない存在として見直す必要もあろうと思う。

「まぼろしの祖国」のエピローグで戦後沖縄の教育方針を論じる座談会の一部が提示され、そこで、陸軍士官学校出の高校教師が、「絶望と解放感が両立するのです」とさらりと言い切り、戦前からの校長、戦前からの官吏等が、新しい沖縄の教育の在り方について熱心に討議する場面がある。そこに内在しているものと「善賀先生」の「虚像」とが、どう関わってくるのか、恐らくこれは自身の課題としても存続すると思われる。

本著のとりあえずのまとめとして、里原さんは、島尾敏雄の「ヤポネシアと琉球弧」の一文を紹介している。ヤポネシアとは「弧状

をなしている日本列島」を「複合的民衆が——独自の文化をもち——重層的な交流を繰り返している空間概念として——定着させ」ることに「オキナワ人」の総合的自立性を見出そうとする思想であり、そこに大城立裕の「沖繩人の「ハヤマト」なしでは生きられない歴史的现实をつめたく認識することが必要であると思ふ」という言葉を対応させている。とりあえずこれが本著のひとつの帰結点となるのであらう。

里原さんの内部には少し乱暴な表現をあえてすれば、日常的な優しさに充ちた「許容」する空間と、己れの「思想核」に他者の安易な侵入を許さない「峻拒」する空間が混在し

山崎行雄著

### 『田宮虎彦論』を読む

山崎行雄著『田宮虎彦論』（オリジン出版センター刊）は六百枚近くの労作で、本の厚さが三・三センチもの大冊であった。さいきんこれほどの大冊を手にしたことがなかった

ているように感じられる。「琉球弧の文学」はこの「峻拒」する核の部分を一貫した硬質の文体で表現しようとしている。そして「許容」と「峻拒」のはざまに、里原さん自身の「苦渋にみちた沈黙」と「複雑にゆれる」テーマがなお存在しているように思える。それについて又別の文体で語られる時更に新しい文学論が広がる可能性を感じるのである。

（かどわき こうじろう・一九六八年修士了）  
（一九九一年十二月、法政大学出版局刊・一三三九円）

△著者＝一九五九年卒

堀江泰紹

ので出版元の武内辰郎氏から手渡された時はおどろいたほどである。

実は、山崎氏とは違った形で、私は田宮虎彦とかかわっていた。一九八八年四月九日

朝、田宮が自殺し、十二日の葬儀には参列した。そのあと、私の発行している町田ジャーナルという地方新聞に知人の文芸評論家・鶴岡冬一氏に依頼して追悼文を書いてもらい掲載した経緯がある。鶴岡氏は三高時代の田宮虎彦の後輩に当たる人で勿論交流があった。

山崎氏は、「田宮文学は、私の『文学上の初恋』であった」と書き、次いで「一等最初にお会いした文学者も、田宮氏」と述べておられる。私も昭和三十年四月に上京し、その翌年一月に吉祥寺の成蹊大学前の田宮虎彦の新居を訪ねている。そして、私にとっても一等最初にお会いした文学者であったのだ。私にとって田宮文学は「初恋」というわけではなかった。椎名麟三や野間宏など、第一次戦後派文学者の作品にいかれており、なかななく野間宏の「真空地帯」をバイブルがわりに持ち歩いていた。しかし自ら文学作品を書くようになった段階で、私は志賀直哉の「大津順吉」や「和解」、梶井基次郎の「檸檬」や「冬の蠅」など一連の短編から文章上の技術を学ぼうとしていた。一方、文学の思想として、東北的暗さとも受け取れる田宮文学に傾倒していたのである。